

「高齢期」の喪失

--- 政府世論調査のテキスト分析から ---

竹内みちる（京都大学）¹

要 約

いつまでも老いることのない高齢者---「何歳になっても現役」というように、往年と変わらぬ存在として的高齢者。その一方、寝たきりの高齢者。周りの人にケアしてもらわなければ、明日をも生きられない高齢者。我々の持つ高齢者に対するイメージは、現在、この2つに分極化している。我々は、いつから、このような単純で貧困なイメージしかもてなくなったのだろうか。現実の高齢者は、より多様で固有の生を生きているのではないだろうか。本研究は、上記のようなパターン化した「高齢者」の意味を再検討し、そこに欠落している可能的意味を探ろうとするものである。さらに言えば、かつては存在したにもかかわらず、ここ半世紀の中で消滅した「高齢者」の意味を再発見し、その現代的意義を考察しようとするものである。

本研究の方法的特徴は、政府機関が実施した世論調査の質問票をテキスト分析の俎上に載せた点にある。特に、本稿の中で扱った世論調査の内でも、1954年の世論調査は、高齢化が注目を浴びるはるか以前、高齢者が政策的課題として本格的に組み込まれる以前に実施されたものであり、極めて重要な分析対象である。

本稿では、まず、本研究の目的と方法を述べた上で、上記の1954年調査を分析し、それ以降急速に消滅していった「高齢者」概念を指摘した。すなわち、1954年の世論調査では、高齢者は、他の世代とは異なり、「自らの来たりこし道を振り返り、来たるべき死を直視する」存在であったことを指摘した。次に、その概念が、いかなる「高齢者」概念によって代替されたのかを、同じく高齢者を調査対象とした1960年代以降の調査票を分析しながら明らかにした。最後に、より積極的に、「来たりこし道をふりかえり、死を直視する」高齢期を再発見することの現代的意義について論じた。

キーワード：高齢者、イメージ、死、テキスト分析、世論調査

¹京都大学大学院人間・環境学研究科（現所属：株式会社原子力安全システム研究所）
takeuchi@inss.co.jp

謝辞 本稿で取り上げた調査票は、故・新納寛子さん（平成17年度京都大学総合人間学部卒業）によって収集されたものである。ここに記して感謝申し上げますとともに、ご冥福をお祈りいたします。また、本稿執筆に際し、杉万俊夫先生（京都大学大学院人間・環境学研究科）にご指導いただきました。ここに感謝の意を表します。

1. 2つの高齢者像

わが国は、2007年から国際連合が定義するところの超高齢社会（総人口に占める65歳以上の高齢者の人口割合（高齢化率）が21%以上）に突入した。2009年7月現在、わが国の高齢化率は22.6%であり、これは世界最高である。また、わが国は、高齢化、超高齢化したスピードにおいても、世界の最短記録をもつ。すなわち、高齢化率が7%から14%に上昇するのに、イギリスでは47年、フランスでは115年、スウェーデンでは85年要したのに対して、わが国ではわずか24年しかかからなかった（内閣府，2006）。

現下の日本社会において、高齢者に対するイメージは2つに分極化している（天野，2000，p.33）。すなわち、1つ目は、病と衰弱に閉塞し介護を必要とする社会的弱者としての高齢者像であり、2つ目はいつまでも生命力に満ちて「老いない」活動的な高齢者像である。そして、現在は前者から後者への重心移行過程であると天野（2000）は付け加えている。このような、高齢者像の負（社会的弱者としての高齢者像）から正（「老いない」高齢者像）への転換は、天野（2000）によれば、老い衰える無能力者という老人神話からの脱神話化に対し一定の効果を発揮したが、下記の3点の問題点を抱えているという（天野，2000，p.33）。

- ① 社会にとって介護負担の少ない、それゆえに都合の良い「元気老人」の強調
- ② 他者の介護なしには生きることの出来ない老人の存在の「否定」
- ③ 2つの極の間にある老いの多様性を認め、そうした老いを連続的な過程として捉える視点を消去していく危険性

確かに、高齢者の両極化したイメージは、研究の文脈の中にも深く浸透している。例えば、現代の老人問題の語られ方として中村（1987）が指摘する、「総人口に占める老人比率をはじき出し、その値が急速に高まりつつあることを示し、若い世代や「未来」の青年（子ども）の経済的負担の増大を指摘する」というパターンは、病と衰弱に閉塞し介護を必要とする社会的弱者としての高齢者像をベースとしていると解釈できる。逆に、老年学においては、「老年期を健康で、趣味やサークル活動に積極的に関わりながら過ごし、主体的に生きてゆく」（天田，2003，p.83）高齢者像が前提とされている。これは、いつまでも生命力に満ちて「老いない」活動的な高齢者像であると解釈できる²。

本研究は、現在、二極化した「高齢者」の意味を再検討し、そこに欠落している可能的意味を探ろうとするものである。さらに言えば、かつては存在したにもかかわらず、ここ半世紀の中で消滅した「高齢者」の意味を再発見し、その現代的意義を考察しようとするものである。

2. 方法

本研究の方法的特徴は、政府機関が実施した世論調査の質問票（アンケート文）をテキスト分析の俎上に載せた点にある。世論調査の結果については、非常に多くの研究が分析

² 近年注目を浴びている *successful aging* も、この「老いない」活動的な老人像の典型である。

対象にしているが、世論調査のアンケート文そのものをテキスト分析の俎上に載せた研究はほとんどないのではなかろうか。

世論調査は、ある事柄（ここで言えば高齢者）のさまざまな側面（トピック）について知ろうとするために実施される。その事柄の「どのような側面について聞くか」は、当然ながら、その時代・その場所での調査者の前提となっている見解に規定される。その見解が変化した場合には、知りたいトピックやそれに関連付けられる質問項目、質問文のワーディングも変化する。したがって、調査票で問われているトピックや質問項目、質問文のワーディングを分析することで、その時代・その場所における調査者の前提となっている見解（本稿の場合であれば、高齢者に対する見解）を読み取ることができる。

ここで、本論に入る前の準備段階の第1として、分析に使用した世論調査について簡単に述べておこう。使用した世論調査一覧は本稿末尾の付録を参照されたい。政府機関による世論調査は、その規模や対象を問わなければ、かなりの数にのぼるが、本研究では、まず、「世論調査一覧. 昭和22年8月－平成14年3月」より、22件の高齢期に関する調査を選定した。次に、平成14年4月から平成18年3月までの期間の調査を内閣府世論調査のホームページから収集した³。さらに、「世論調査年鑑：昭和34年度－平成18年度版」の「第3部：主要世論調査結果一覧」に記載されているものも収集した。

以上のような収集手続きを踏んで、最終的に、1954年～2005年の期間における43件の調査を収集することができた。その年代別内訳は、表1に示しているように、1950年代2件、1960年代4件、1970年代10件、1980年代9件、1990年代12件、2000年代6件である。以下、引用した調査を示すに当たっては、年号を表記するだけにとどめる。その際、高齢者のみを対象とした調査には、年号の後ろに（高齢者のみ）と表記する。例えば、高齢者のみを対象とした1969年の調査は、「1969年調査（高齢者のみ）」と表記する。同様に、一般成人のみを対象とした調査は、「1954年調査（一般成人のみ）」と表記する。同じ年号の調査が複数ある場合は、年号にアルファベットを追加して識別している（例えば、「1993a年調査（一般成人のみ）」、「1993b年調査（一般成人のみ）」）。

表1 分析に使用した世論調査年代別件数

年代	世論調査全体件数	高齢者向け調査数	一般向け調査数
1950年代	2	1	1
1960年代	4	3	1
1970年代	10	2	8
1980年代	9	1	8
1990年代	12	5	7
2000年代	6	3	3

本研究で収集した政府世論調査の中でも、特に、1954年の世論調査は、高齢化が注目を浴びるはるか以前、高齢者が政策的課題として本格的に組み込まれる以前に実施されたものであり、極めて重要である。当時の高齢者を調査対象とした、その世論調査の中には、

³ 内閣府（2003a,b, 2005）

その後急速に姿を消していった種類の質問項目が含まれていた。

本論に入る前の準備段階の第 2 として、はじめに述べた、2 つの典型的な高齢者像、すなわち、「病と衰弱に閉塞し介護を必要とする社会的弱者としての高齢者像」と「いつまでも生命力に満ちて「老いない」活動的な高齢者像」が、近年の世論調査の中にもはっきりと見られることを指摘しておく。

2 つの高齢者像を表す世論調査の質問項目は多々あるが、代表的な例を挙げる。「病と衰弱に閉塞し介護を必要とする社会的弱者としての高齢者像」を表すような世論調査のアンケート文は、下記のようなものが典型的には挙げられる。

[1995 年調査（一般成人のみ）、2003a 年調査（一般成人のみ）]

Q2 あなた自身が老後に寝たきりや痴呆症になるかもしれないと、不安に思うことがありますか。

（選択肢略）

[2003a 年調査（一般成人のみ）]

Q4 仮にあなたが、老後に寝たきりや痴呆になり、介護が必要となった場合、どんなことに困ると思いますか。この中からいくつでもあげてください。

（選択肢略）

上記の質問項目に現出するものは、介護の対象として、寝たきり、痴呆といった病に苦しむ高齢者像であり、「病と衰弱に閉塞し介護を必要とする社会的弱者としての高齢者像」を示している。

また、「いつまでも生命力に満ちて「老いない」活動的な高齢者像」も多く見られる。例えば、以下のような項目に顕著に見て取ることができる。

[2005 年調査（一般成人のみ）]

Q6 従来、高齢者は社会に対する貢献を終え、社会に支えられる存在として認識されてきましたが、今後の高齢社会においては、高齢者もできるだけ能力・経験を発揮し、社会の支え手・担い手の側にまわるべきであるという意見もみられます。あなたはこうした意見についてどのように考えますか。この中から 1 つだけお答え下さい。

1. そう思う
2. そうは思わない

[1989 年調査（一般成人のみ）]

Q11 今後、高齢者はどのような心構えで生きるのが良いと思いますか。この中ではどうですか。

1. 高齢になればなるほど気を若々しくして、若者の活動にもできるだけ対等に参加する
2. 高齢になったら年相応の生活を心がける
3. 年齢にはとらわれずに自由に自分の生き方を考え、主体的に活動する

2005年調査（一般成人のみ）Q6には、「老いない」活動的な高齢者像を、生産人口としてカウントしようとする考えがうかがえる。1989年調査（一般成人のみ）の選択肢1には「若者との対等性」、選択肢3には「個別性」が謳われ、「老いない」高齢者像が見られる。

3. 消滅した「高齢者」概念 ---- 1954年世論調査のテキスト分析

本節では、1954年調査（高齢者のみ）の質問票（アンケート文）を詳細に分析する。結論を先取りするならば、その作業を通じて、かつては存在したにもかかわらず、ここ半世紀の中で消滅した「高齢者」の意味を再発見する。

まず、この1954年世論調査が行われた時代背景について述べておこう。今でこそ日本は世界一の長寿国と言われている（2008年の平均寿命、男性79.3歳、女性86.1歳）が、1954年調査が行われたころの平均寿命は、男性63.4歳、女性67.7歳（1954年）であり（厚生労働省、2009）、現在の人生80年とは異なり、言うなれば人生65年という状態であった。

1950年代は、また、高齢者問題が政策的課題として本格的に取り組まれる以前の時期であった。すなわち、人口増加によって高齢者人口が低く抑えられてきたことと、平均寿命が現在の水準よりもかなり低かったこと、直系三世同居の高比率を背景に、政府も老親扶養意識は変化していないものと考え、高齢者問題を貧困問題の一部としてしか扱ってこなかったため、1950年代の後半でさえ、国家レベルの課題として高齢者に政府が注目することはなかった（君島、1997, p.50-51）。この政府の高齢者に対する無関心が変化しだすには、1963年の老人福祉法制定を待たねばならなかった。

さて、そのような時代背景のもと、1954年に郵政省簡易保険局が、下記2部からなる世論調査を行った。名称、対象者とその人数、回収率は下記の通りである。抽出法は層化多段無作為抽出法（但し、第一次単位の抽出は確率比例抽出法による）であり、調査法は、面接法であった⁴。

- (1) 「老後の生活についての世論調査」、20～59歳の男女2000名対象（回収率91.2%）
- (2) 「老人の生活実態についての調査」、60歳以上の男女500名対象（回収率95.6%）

「老人の生活実態についての調査」は、初めて全国の高齢者を対象とした調査であった。まず、1954年調査（高齢者のみ）の全体的な構成を整理してみよう（この調査の質問項目はほとんどが自由回答の質問である）。表2に質問項目を示した。

表2 1954年調査（高齢者のみ）の質問項目

-
- Q 1. あなたは今、自分はしあわせ（幸福）だと思いますか、あまり幸福（しあわせ）な方ではないと思いますか。
- Q 2. 今の生活で、あなたが一番楽しい時はどういう時ですか。
-

⁴ 本稿で取り扱う世論調査は、1980b年調査（一般成人のみ）の「高齢化問題調査」を除き、すべて調査法は面接法である。1980b年調査（一般成人のみ）は、配布留置法による。

Q 3. 今あなたが非常に心配していること、悩んでいることはありませんか。……どんなことですか。

SQ. [(Q3. で) 家族、親族の問題にふれぬ場合] 殊に家族の方やお子さんのことで、そういうことはありませんか。

Q 4. あなたは、さびしいと感じることはありませんか。……どんな場合ですか。

Q 5. あなたは、これから先、何かやってみたいこととか、何かほしいものはありませんか。

Q 6. あなたは、なるべくなら長生きをしたいと思いませんか。

Q 7. あなたは死というものについて、どうお考えになりますか。(死ぬことはこわいとか、いやだとか、その他いろいろに云われていますが、そういう点、あなたはどのようにか。)

Q 8. あなたは今迄の生活をふりかえてみて、どう思いますか。

Q 9. 今迄の生活で一番楽しかったのは、あなたの幾つ位の時ですか。[その内容]

Q10. 今迄の生活で一番いやだったのは、あなたの幾つ位の時ですか。[その内容]

Q11. 日本が戦争に敗けた時はどう感じましたか。

Q12. 今の若いものについて……何かございませんか。(今の若いものをどう思いますか。)

Q13. 「世間の家を見ると、年をとった親が昔ほど大事にされなくなったようだ」と云う人がありますが、あなたもそう思いますか。そうは思いませんか。

1. 大切にされなくなった
2. まあそう思ふ
3. そうは思はぬ

SQ. (Q13. で 1、2 と答えたものに) 大事にされなくなったのは、どうしてだと思いませんか。

Q14. 話は変わりますが、有料老人ホームという名前を聞いたことがありますか。

1. きいた
2. きかない

Q15. これは、年をとった人が集まって暮すための施設ですが、養老院とは違って、国や県(都府)の世話になるものではなくて、自分でお金を払って入るものです。……あなたは、場合によってはそういう所に入って暮してもよいと思いませんか。それとも、入りたくはありませんか。

1. 入りたい
2. 入ってもよい
3. 入りたくない

SQ1. (Q15. で 1、2 を選んだものに) 建てる場所は、海岸とか、山の中とか、あるいは街の中とか、いろいろ考えられますが、どういうところがよいと思いませんか。

1. 海岸
2. 山の中
3. 街の中
4. その他 ()

SQ2. (Q15. で 1、2 を選んだものに) 建て方は、日本式がよいでしょうか。西洋式がよい

でしょうか。

1. 日本式
2. 西洋式
3. その他 ()

SQ3. (Q15. で 1、2 を選んだものに) 部屋は、何人か一緒のほうがよいでしょうか。それとも、一人又は夫婦で一部屋のほうがよいでしょうか。

1. 相部屋
2. 個室

SQ4. (Q15. で 1、2 を選んだものに) 利用料金は、食費共で月いくら位がよいでしょうか。月 () 円

SQ5. [SQ4. で、5000 円未満だったものに] あなたでしたら、5~6000 円はお出しになれませんか。

1. 出せる
2. 出せない

SQ6. (Q15. で、有料老人ホームに「入りたくない」と答えたものに) どうしてですか。

Q16. ところで、最後におうかがいしますが、あなたが今一番のぞんでいるのは、どんなことですか。

上記の質問項目群をテーマ別に整理すると、次のような流れを構成していることが分かる。

- (1) 挨拶的なもの Q1~Q4
- (2) 短いこれからの人生について Q5,Q6
- (3) 死についての意見 Q7
- (4) 長かった人生を振り返る Q8~Q11
- (5) 今現実の個人主義 Q12,Q13
- (6) 老人ホームについて Q14,Q15 (施策問題)
- (7) 今一番望んでいることについて Q16

以上のテーマの流れは、次のように解釈することができる。導入部(1)に続いて、(2)はこれからの人生について聞いているわけであるが、それは先ほど述べた平均寿命からも、またそのすぐ後の(3)で死についての意見を聞いていることから、今後の人生は短く、死へと近接した期間であるという前提に立っていると考えられる。その上で、(4)では、そのような短い今後の人生を残すまでに至った自分の人生を振り返り、そして、(5)において今現在目の前にある現実(若い世代との差や大事にされない親)をふまえて、(6)で、本調査の眼目とも言える老人ホームという施策問題への意見を聞くという構造になっているのである。最後に、(7)では、過去でも未来でもない現在の生活について、大まかな枠組みで希望を聞き、調査の締めくくりとされている。

では次に、この世論調査が前提としていること、この時期の「高齢者」の特徴について考えていこう。そのために、この 1954 年調査(高齢者のみ)においてのみ見られ、1960 年代以降の調査では、全く扱われなくなった 2 つのトピックに注目してみよう。

そのトピックの 1 つ目は、「高齢者（回答者）が今までの長い人生をいかに送ってきたか」という過去を回顧的（retrospective）に振り返るというトピックである。上記の（4）は、このトピックを正面から取り上げている。言うまでもなく、世論調査は、ある事柄のさまざまな側面（トピック）について知るために実施される。したがって、「何を尋ねるか」は、「何を尋ねればわかったといえるか」という調査者の判断基準を満たすように作られている。その意味で、当時の調査者（政府機関）は、自らの人生に対する高齢者の回顧的把握のありようが、老後の生活を大きく規定すると考えていたことが示唆される。具体的には、「今迄の生活をふりかえてみて、どう思いますか。」「今迄の生活で一番楽しかったのは、あなたの幾つ位の時ですか。〔その内容〕」「今迄の生活で一番いやだったのは、あなたの幾つ位の時ですか」「日本が戦争に敗けた時はどう感じましたか」という質問への回答に現れる回顧的把握が、老後の生活を理解するためには重要と見なされていたことが示唆される。過去との回顧的なつながりが、質問者の関心事になるという点は、この 1954 年調査（高齢者のみ）にのみ見られる特徴であり、このトピックが、その後の世論調査で取り上げられることはなかった。

1954 年調査に特徴的なトピックの 2 点目は、死についてのトピックである。すなわち、同調査では、高齢者に対して、死についてどう思うかをストレートに尋ねている。その典型は、「Q7.あなたは死というものについて、どうお考えになりますか。（死ぬことはこわいとか、いやだとか、その他いろいろに云われていますが、そういう点、あなたはどのようにか。）」である。

高齢者に対して、「死」そのものをどう思うのかについて質問しているのは、この 1954 年のみである。例えば、2002 年調査（高齢者のみ）の Q25 は、以下のような質問であるが、これは「死」そのものについて聞いているのではなく、その前の生（延命医療）について聞いている質問である。

Q25 万一、あなたの病気が治る見込みがなく、死期が近くなった場合、延命のための医療を受けることについて、どう思いますか。この中から 1 つお答えください。

1. 少しでも延命できるよう、あらゆる医療を行ってほしい
2. 延命のみを目的とした医療は行わず、自然にまかせてほしい
3. その他

以上、1954 年調査の特徴をまとめておこう。1954 年調査（高齢者のみ）は、下記の 2 つの以後消滅した特別なトピックを取り上げている。

- (1) 高齢者が過去いかなるものであったか
- (2) 高齢者が死についてどう思うか

これは、それぞれ以下のように読み替えられるのではないだろうか。

- (1) 自らの来たりこし人生を回顧する高齢者像
- (2) 死を直視する高齢者像

このように、1954 年調査（高齢者のみ）は、他の世代とは異なる「自らの来たりこし道を振り返り、来たるべき死を直視する」高齢者像を持っていたのではないかと考えられる。

4. 消滅した「高齢者」概念を代替した概念 ---- 1960年代以降の世論調査より

前節で1950年代当時の「高齢者」概念について描写した。本節では、それが、いかなる「高齢者」概念によって代替され、消滅したのかを、同じく高齢者を調査対象とした1960年代以降の調査票を分析しながら明らかにする。前節で、過去との回顧的なつながりが、質問者の関心事になるという点が1954年調査（高齢者のみ）の一つの特徴であると述べた。しかし、1960年代以降も回答者の過去について聞く質問項目は一定の割合で質問の中に存在している。そのような質問と、1954年調査（高齢者のみ）における過去に関する質問との違いを本節では詳細に検討する。

まず、具体的にどのようなことを聞いているのかを挙げていく。表3から、主に、1960年代以降の質問形態は、「Xの経験がありますか？」という個別事象の経験の質問であることがわかる。

表3 1960年代以降の過去について聞く質問項目

内容	例
過去の仕事について	(Q9で仕事をもっていないと答えたものに)以前何か仕事をしていたことがありますか。
健康診断受診の有無	この1年くらいの間、あなたは、健康診断をお受けになりましたか。
交通事故の有無	あなたは、ここ5年ぐらいの間に交通事故にあったことがありますか。
交通安全講習受講の有無	あなたは、これまで、交通安全についての講習(説明)や指導を受けたことがありますか。
資産贈与の有無	これまでに、あなた(あなた方夫婦)名義のまとまった資産(動産・不動産)を、どなたかに贈与されたことがありますか。
不動産取得の方法	あなたは(あなた方夫婦)の名義の不動産は、あなた(あなた方夫婦)が築かれたものですか。それとも相続されたり、贈与を受けたものですか。
友人になったきっかけ	その友人とは、どのようなきっかけで知り合いになりましたか。
介護の経験	あなたは、今までにお年寄りの身の回りの世話をなされたことがありますか。

自主的活動の経験	あなたは、この1年間に、個人でまたは友人と、あるいはグループや団体で自主的に行われている、次のような活動に参加したことがありますか。
借家に関する困難経験	あなたは、借家に居住するにあたって困ったことがありましたか。
つきあいを阻害された経験	過去1ヶ月間に、家族、友人、近所の人、その他の仲間とのふだんのつきあいが、身体的あるいは心理的理由で、どのくらいさまたげられましたか。
精神状態	<p>次にあげるのは、過去1ヶ月間に、あなたがどのように感じたかについての質問です。この中から(1)～(5)それぞれについて一番よくあてはまるものを1つお答えください。</p> <p>(1) 元気いっぱいでしたか</p> <p>(2) かなり神経質でしたか</p> <p>(3) どうにもならないくらい、気分がおちこんでいましたか</p> <p>(4) おちついていて、おだやかな気分でしたか</p> <p>(5) 楽しい気分でしたか</p>
転倒経験	あなたはこの1年間に、お住まいの中や庭、バルコニーなどで転んだことがありますか。けがのない程度の転倒も含みます。
リフォーム経験	過去5年間に、現在お住まいの住宅について、次のような改造(リフォーム)をしたことがありますか。

1954年調査(高齢者のみ)では、高齢者(回答者)が、いかに自らの人生を回顧しているか、という「過去」に直接的かつ一義的な興味を持たれていた。では、それ以降の年代ではどうだろうか。この点は、「過去」に関する質問項目の前後に、どのような質問項目が配置されているかを視野に入れることによって明らかになる。以下に、その具体例を示す。下線を引いてある文章が、上記に挙げた「過去」について聞いている質問項目である。

[1969年調査(高齢者のみ)]

Q9 あなたは、現在、何か収入のある仕事をお持ちですか。農業や家業の手伝いでもかまいませんが、台所仕事や洗たくなどの家事は含めないでください。

SQ1 (Q9で仕事を持っていると答えたものに) あなたの今やっている仕事はどんなものですか。

- SQ2 (Q9 で仕事を持っていると答えたものに) では、今の仕事に定年がありますか。
- Sq3 (Sq2 で定年があると答えたものに) 定年は何歳ですか。
- Sq4 (Q9 で仕事を持っていると答えたものに) あなたは、定年後も働きたいと思えますか。
- SQ5 (SQ4 で働きたいと答えたものに) 定年後はどんな仕事をしたいと思えますか。
- Sq6 (SQ4 で働きたいと答えたものに) 定年後も働きたいのはどうしてでしょうか。
- Sq7 (Q9 で仕事を持っていないと答えたものに) あなたは毎日、おもにどんなことをして過ごしていますか。
- Sq8 (Q9 で仕事をもっていないと答えたものに) 以前何か仕事をしていたことがありますか。
- Sq9 (Sq8 で仕事をしていたことがあると答えたものに) それはどんな仕事でしたか。一番長くしていたのはどれでしょうか。
- Sq10 (Sq8 で仕事をしていたことがあると答えたものに) その仕事は、定年まで勤めて退職したのですか。

...

[1981 年調査 (高齢者のみ)]

- Q1 あなたは今までに、お年寄りの身のまわりの世話をなされたことがありますか。
- SQ1 (ある者に) どなたのお世話をなされたのですか。現在世話をしている場合を含めてお答え下さい。
- SQ2 (ある者に) そのお世話の内容は、どのようなことですか。この中からいくつでもお答え下さい。
- Q2 あなたは、自分が将来寝たきりとなった場合の身の回りの世話のことや生活費の事を心配することがありますか。
- Q3 もし仮にあなた自身が寝たきりとなって、おむつ等の下の世話を受けなければならぬ状態になった場合には、主としてだれに身の回りの世話をしてもらつつもりですか。

[1992 年調査 (高齢者のみ)]

- Q6. あなたは、この 1 年間に個人でまたは友人と、あるいはグループや団体で自主的に行われている、次のような活動に参加したことがありますか。いくつでもお答えください。
- Q7. では、あなたは、グループや団体で自主的に行われている活動 (地域活動) に、今後とも (又は今後は)、参加したいと思えますか。参加したくないと思えますか。

ちなみに、1954 年調査 (高齢者のみ) の前後は以下の質問である。

[1954 年調査 (高齢者のみ)]

- Q7 あなたは死というものについて、どうお考えになりますか。(死ぬことはこわいとか、いやだとか、その他いろいろに言われていますが、そういう点、あなたはどのようにでしょうか。)

Q8 あなたは今迄の生活をふりかえってみて、どう思いますか。

Q9 今迄の生活で一番楽しかったのは、あなたの幾つ位の時ですか。[その内容]

Q10 今迄の生活で一番いやだったのは、あなたの幾つ位の時ですか。[その内容]

Q11 日本が戦争に負けたときはどう感じましたか。

Q12 今の若い者について・何かございませんか。(今の若い者をどう思いますか。)

上記の具体例から、1969年以降は、同じ質問の現在版または未来版が前後に配置されていることがわかる。つまり、同じ過去に関する質問であっても、1954年調査(高齢者のみ)の質問が、もうすぐ迎える死を直視して、「過去をふりかえる」ことに特化した質問であるのに対し、それ以降の質問は、そのように過去を把握するのも現在を把握するため、そして将来を把握するための質問である。そこには、過去は、あくまでも現在・将来の前段階と位置付けられており、「過去→現在→将来」と続く将来に向かった視座が存在している。

このような視座の変化は、高齢者が政策的課題として本格的に組み込まれていったことによると考えられる⁵。1963年老人福祉法制定に端的に象徴されるように、60年代以降、高齢期・高齢者は、本格的な政策的課題として組み込まれた。政策的課題として組み込まれることによって起きた変化とは、本稿の文脈に即してもう一度具体的に述べれば、高齢期を、過去とのつながりによって把握する視座から、過去をも現在・未来に向けてのステップであるという連続性の中で捉える視座への変化であると言える。

4. 考 察

前節までに、1954年調査(高齢者のみ)における高齢期が、「来たりこし道をふりかえり、死を直視する時期」であったことを発見し、また、そのような高齢期が、1960年代以降、高齢者が本格的に政策的課題として組み込まれていくことによって、「終わりなく継続していく時期」へと置き換えられていったのではないかという点を指摘した。本節では、「来たりこし道をふりかえり、死を直視する」高齢期を再発見することの現代的意義について論じる。

本稿では、1954年調査(高齢者のみ)の世論調査のテキスト分析によって、「来たりこし道をふりかえり、死を直視する」高齢期(高齢者)という、現代社会において両極化した2つの高齢者像のいずれとも異なる高齢者像を提示した。「老いない」高齢者像は、「来たりこし道をふりかえり、死を直視する」高齢期とは、正反対の高齢期である。つまり、「老いない」高齢者像は、他の世代と変わらず、「終わりなく続いていく」高齢期を元気に生きる高齢者像の典型として理解できる。また、病と衰弱に閉塞し介護を必要とする社会的弱者としての高齢者像、すなわち、介護の対象としてのみの高齢者像も、「来たりこし道

⁵ 政策的課題として組み込まれた背景には、扶養意識の変化、高齢化率の上昇、平均寿命水準の上昇などが密接に絡み合っていると考えられる。これらの関連については、本稿では取り扱うことはできないが、1969年の男性の平均寿命は69.2、女性74.7であり、1954年と比べて男性で約5.6年、女性で約7年延びていた。また、1970年の高齢化率は7.1%であり、1950年は4.9%である。つまり、この間に2.2%高齢化率は上昇していた。

をふりかえり、死を直視する」高齢期とは異なっている。介護の対象としてのみの高齢者像からは、過去との関連も、死に対する直視も見ることができないからだ。つまり、本稿は、社会的弱者として的高齢者像と、「老いない」活動的な高齢者像という 2 つの極に回収されない、老いの多様性の一端を示し、私たちの中に、上記の 2 つとは異なった 1 つのイメージを付け加えることができたと言えるのではないだろうか。

最後に、現代社会において両極化した 2 つの高齢者像とは異なった高齢期を、単純に発見できたというだけでなく、より積極的に、「来たりこし道をふりかえり、死を直視する」高齢期を再発見することの現代的意義について論じる。「来たりこし道をふりかえり、死を直視する」高齢期が、1954 年という歴史的な文脈の中に埋め込まれたものであることは、もちろん忘れてはならない。しかし、それでもなお、そのような 50 年以上も前の高齢期を現在、もう一度再発見することの意義もあるのではなかろうか。

来るべき死を直視する時、私たちが、採用することが難しくなる枠組みが存在する。それは、前望的 (prospective) な時間意識の枠組みである。これは、平たく言えば、「未来のための今」、すなわち、未来のある時点から今を意味づけるという時間意識の枠組みである。この「未来のための今を生きる」という前望的な時間意識は、例えば、「あと 1 日で死ぬ」となったら、(未来がないため) 維持できないことは自明である。つまり、来るべき死を直視した時、私たちは、前望的な時間意識の限界にぶつかるのだ。そして、そのような限界を見ることによって、私たちは、前望的な時間意識の絶対性を相対化する。すなわち、そのような前望的な時間意識が、意味あるものとなる時期もあるし、そうでない時期(「死を直視する高齢期」)もあるという形で理解することが可能になる。

逆に言えば、現在、私たちは、この前望的な時間意識という枠組みを、極めて強力に採用している。例えば、鷺田 (2003) は、近代の産業社会は、前望的な時間意識に貫かれているということを指摘している。鷺田 (2003) は、プロ (前に、先に) という前のめりの姿勢が、知的もしくは物質生産性の累進的増大をめざす近代社会を貫いていることを指摘しているのである。

これら「プロ」を接頭辞とする言葉は、ラテン語もしくはギリシャ語の語源をたどれば、それぞれ、前に投げる、前方に作る、先に見る、先に描く、前方に引っぱる、前方に置く、前に進む、前に動くという意味である。これらは、未来の決済を前提に現在の取引がおこなわれる、あるいは決済 (プロジェクトの実現や利益の回収) を前提にいまの行動を決めるといふ、産業社会の論理をあらわすものであり、また個人の同一性とその正当化の根拠は個人の出自ではなく、彼が将来に何をなし、何を達成するかにかかっていると考える近代市民社会の論理をもあらわしている。(鷺田, 2003, p.64)

このような前望的な時間意識の枠組みを強力に採用する現代社会という文脈の中に、「来たりこし道をふりかえり、死を直視する」高齢期を再発見することの現代的意義を見出すことができると考える。

最後に、本稿の限界と今後の課題について述べる。本稿では、「来たりこし道をふりかえり、死を直視する」高齢期の再発見とその現代的意義について論じてきた。しかし、本稿では、この「来たりこし道をふりかえり、死を直視する」高齢期が実際の生活では、どの

ような状態を指すのかという、より生活史的な観点からの描写は行うことができなかった。また、方法論的には、本稿では、まずは主要な世論調査を分析の対象とし、特に 1950 年代と 1960 年代以降の変化に注目した。分析の対象とする世論調査の範囲は、無論、漸次拡大していく必要がある。

引用文献

- 天田城介 (2003). <老い衰えゆくこと>の社会学 多賀出版
- 天野正子 (2000). <まなざし>にみる老いの日本近代 歴史評論, 608, 32-48.
- 天野正子 (2006). 老いへのまなざし——日本近代は何を見失ったか 平凡社
- 君島昌志 (1997). 福祉政策の転換に関する考察 (1) ——1970 年代における日本型福祉社会論と高齢者政策の変容を中心にして 島根女子短期大学紀要, 35, 47-56.
- 厚生労働省 (2009). 平成 20 年簡易生命表の概況について 厚生労働省 2009 年 7 月 16 日 <<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life08/index.html>> (2009 年 11 月 1 日)
- 内閣府 (2003a). 公的年金制度に関する世論調査 内閣府 2003 年 4 月 28 日 <<http://www8.cao.go.jp/survey/h14/h14-kouteki/index.html>> (2009 年 11 月 1 日)
- 内閣府 (2003b). 高齢者介護に関する世論調査 内閣府 2003 年 10 月 6 日 <<http://www8.cao.go.jp/survey/h15/h15-kourei/index.html>> (2009 年 11 月 1 日)
- 内閣府 (2005). 「高齢社会対策に関する特別世論調査」の概要 内閣府 2005 年 10 月 24 日 <<http://www8.cao.go.jp/survey/tokubetu/h17/h17-kourei.pdf>> (2009 年 11 月 1 日)
- 内閣府 (2006). 平成 18 年版高齢社会白書 内閣府 2006 年 6 月 2 日 <<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2006/zenbun/html/i1152000.html>> (2009 年 11 月 1 日)
- 中村達也 (1987). 老後を支える経済 伊東光晴・河合隼雄・副田義也・鶴見俊輔・日野原重明 (編) 老いの発見 5 老いと社会システム 岩波書店 pp.121-142.
- 鷺田清一 (2003). シリーズ 生きる思想 4 老いの空白 弘文堂

—— 2009. 1. 15 受稿, 2010. 5. 28 受理 ——

付 録

付録 I 使用した世論調査一覧（一般成人のみ）

西暦	調査名	母集団	標本数	回収数	回収率(%)
1954	老後の生活（第1部）	全国の20～59歳のもの	2000	1824	91.2
1961	国民年金	全国20歳以上のもの	4500	3827	85.0
1971	老人問題	全国20歳以上のもの	3000	2517	83.9
1973	定年制	全国20歳以上のもの	3000	2540	84.7
1974	老親扶養に関する調査（親を扶養する立場にある者の調査）	全国30～49歳以下の男及び30～49歳以下の男の配偶者	(4895)	(4895)	81.7
1975a	公務員の定年制	全国20歳以上のもの	5000	4164	83.3
1975b	老後の生活設計に関する調査	全国の30～55歳のもの	(8794)	(8794)	85.6
1976	中高年の地位と役割に関する調査	全国の45～75歳のもの	(8579)	(8579)	85.8
1977	老後生活への展望に関する調査	全国の30～55歳のもの	10000	8316	83.2
1978	公務員の定年制	全国20歳以上のもの	3000	2607	86.9
1980a	年金問題・高齢化問題	全国20歳以上のもの	3000	2477	82.6
1980b	高齢化問題調査	全国20歳以上のもの	(13959)	(13959)	93.8
1981	勤労者の老後の生活設計	全国の20～59歳までの有職者	3480	2701	77.6
1984	親を扶養する立場にある者からみた老人の地位と役割に関する調査	全国60～74歳の親のいる三世帯世帯（四世代世帯を含む）の代に世代の男女	(2750)	(2750)	78.6
1986a	老人福祉サービス	全国20歳以上のもの	3000	2378	79.3
1986b	長寿社会	全国の20～60歳のもの	5000	3898	78.0
1988	長寿社会における男女別の意識の傾向に関する調査	全国の30～70歳のもの	3000	2308	76.9
1989	高齢期のライフスタイル	全国30歳以上のもの	5000	3830	76.6
1991	長寿社会	全国の20～60歳のもの	5000	3688	73.8
1992	高齢期の快適性	全国の20～60歳のもの	3000	2284	76.1
1993a	高齢期の生活イメージ	全国の30～60歳のもの	3000	2277	75.9
1993b	公的年金制度	全国20歳以上のもの	5000	3806	76.1
1995	高齢者介護	全国20歳以上のもの	5000	3596	71.9
1996	個人年金に関する市場調査	全国の世帯主年齢30～59歳で、世帯員2名以上の普通世帯の夫・妻	6000	4700	78.3

1998	公的年金制度	全国 20 歳以上のもの	5000	3646	72.9
2003a	高齢者介護	全国 20 歳以上のもの	5000	3567	71.3
2003b	公的年金制度	全国 20 歳以上のもの	5000	3578	71.6
2005	高齢社会対策に関する特別 世論調査	全国 20 歳以上のもの	3000	1896	63.2

*1 () で表記している標本数と回収数は、標本数・回収数のどちらなのか不明なもの

*2 回収率の%は、小数点第2位四捨五入で表記

付録Ⅱ 使用した世論調査一覧（高齢者のみ）

西暦	調査名	母集団	標本数	回収数	回収率(%)
1954	老後の生活（第2部）	全国 60 歳以上のもの	500	481	96.2
1960	老人福祉	6 大都市の 65～74 歳のもの	1020	779	76.4
1966	老人福祉	全国 60 歳以上のもの	3067	2607	85.0
1969	老後の生活	全国 50 歳以上のもの	3000	2565	85.5
1973	老人問題	全国 50 歳以上のもの	3000	2542	84.7
1974	老親扶養に関する調査 （子に扶養される立場に ある者の調査）	全国の 60～74 歳のもの	(3627)	(3627)	84.5
1989	老後の資産に関する調査	全国 60 歳以上のもの	3000	2393	79.8
1990	老人の生活と意識に 関する国際比較調査	全国 60 歳以上のもの	—	1004	—
1991	老後の生活と介護に 関する調査	全国の 60～70 歳のもの	1750	1413	80.7
1992	高齢者の地域社会への 参加に関する調査	全国 60 歳以上のもの	3000	2385	79.5
1993	高齢者の日常生活に 関する調査	全国 65 歳以上のもの	3000	2454	81.8
1994	高齢者の住宅と生活環境 に関する調査	全国 60 歳以上のもの	2908	2292	78.8
2002	高齢者の健康に関する 意識調査	全国 65 歳以上のもの	3000	2308	76.9
2003	高齢者の地域社会への 参加に関する意識調査	60 歳以上のもの	4000	2860	71.5
2005	高齢者の住宅と生活環境 に関する調査	全国 60 歳以上のもの	3000	1886	62.9

*1 () で表記している標本数と回収数は、標本数・回収数のどちらなのか不明なもの

*2 回収率の%は、小数点第2位四捨五入で表記

*3 —で表記している箇所は、不明なもの

Reconsidering Elderly Life Images: A Text-Analysis of Government Opinion Survey Questionnaire Items

Michiru Takeuchi (Kyoto University)

The contemporary image of the elderly life in Japan is polarized. In 2009, 23% of the total population was over 65 years old and had the longest life expectancy worldwide. We have two contrasting lifestyle paradigms of the elderly: Either they can be as healthy and proactive as they have been so far, or powerless and they cannot survive without others' support. Our research question in this study focused on how we had reached this worldview where we had reduced such a complex concept to a simplistic stereotypical bipolar image. In this study, we reexamined the two prevailing images and explored an alternative image. Specifically, we tried to rediscover an image that existed until the early 1960s but disappeared until currently.

The method in this study was to retrieve former questionnaire items from opinion surveys administered by the Japanese national government and use them as materials of text-analysis. Among the many surveys analyzed, we focused on one administered in 1954, because at that time, aging was not regarded to be an important political concern or agenda.

After demonstrating the research purpose and method of this study in the first and second sections in this paper, a content analysis was created for the questionnaire items of the 1954 survey. The image of the elderly life that quickly disappeared during this period of economic growth in Japan was highlighted in the third section. This image was totally different from images of the other age clusters in the sense that elderly life was taken as a period in which one's past life should be reflected on and the advent of impending death could be faced directly without denial. In the fourth section, we analyzed what image replaced the 1954 image with the use of other questionnaire surveys administered in 1960s and later. Lastly, in the fifth section, the contemporary significance of rediscovery of the image in 1954 was discussed.

Key words: elderly life image, death, opinion survey, text analysis

Author:

Takeuchi, M.

Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University, Kyoto, Japan.

(Current affiliation: Institute of Nuclear safety System, Inc.)

Mail: takeuchi@inss.co.jp